

【クレーム情報】

水洗い処理による色泣き

汗で汚れた夏物衣料を扱うことが多い時期は、水洗いによる事故も多く発生する傾向がある。ウエットクリーニング等の水洗いによる事故を防ぐには、その品物が水洗いできるかどうかの適切な判断が求められる。今回はその典型例を紹介する。

■事故の状態

袖ぐりの白色編地部分（写真参照。点線部分）が紫色に染まった状態になっている。

■原因

本体の紺色編地の染色が水洗いに耐えられなかったため、染料が水に溶け出して袖ぐりの白色編地部分を汚染したものの。

取扱い絵表示では水洗いを禁じていることから、水に対する染色が不堅ろうであることが推測できたが、袖ぐりの白色編地部分に汗の汚れが目立っていたため、クリーニング業者はあえて水洗いを行った。

■事故の防止対策

取扱い絵表示で水洗いを禁じている品物を水洗いする場合は、あらかじめ水に対する染色堅ろう度をチェックした上、染色が不堅ろうと判断される品物は、水による処理を避けること。特に濃淡のある色柄の品物については十分な注意が必要。

■水洗いでの配慮事項

水洗いでは、染色堅ろう度のチェックに加えて、次のような事項に配慮を必要とする。

①水による弊害への配慮

品物によっては、収縮、パツカリ（縫い目にそって波打つ状態）、移染、色泣き、変退色、各種加工の脱落など、修正が不可能な状態に変化することがある。

このため、品質の確認（予備試験）を厳重に行うとともに、水による処理を行うことで想定される不都合については、利用者の十分な理解および了解を得てから処理すること。

②環境配慮

過去にテトラクロロエチレンによるドライクリーニングを実施したことが明らかな品物は、テトラクロロエチレンが洗たく水の中に溶出して、これが排出される可能性があるため水洗いを避けること。

③素材別の配慮

・毛は湿潤状態で機械作用が加わることでフェルト収縮するため、水洗いの対応がされていない品物に

対しての機械力はできる限り小さくすること

・絹は白化しやすいので、特に湿潤時の摩擦を極力抑えること
・レーヨン乾燥時と比べて湿潤状態での引張り強度が大きく低下するため、過度の張力をかけないこと

■事故防止システムで検索

日本繊維製品・クリーニング協議会が運営する「クリーニング事故防止システム」で染色に関する事故を検索すると、色泣きが109件、移染が87件確認できる（6月30日現在）。このうち、染色堅ろう度に関する事例は、色泣き事故で45件、移染事故で26件、逆に、今回のケースと同様、クリーニングの処理に問題があったものは、色泣き事故で17件、移染事故で19件となっている。本体だけでなく、裏地や芯地、部分使いの装飾などが原因になっている事例もあり、本システムで具体的な事故事例を確認しながら、事前に必要なチェック項目を点検することができる。

クリーニング事故防止システムの利用には、日本繊維製品・クリーニング協議会への入会が必要です。詳細は、日本繊維製品・クリーニング協議会事務局にお問い合わせください。

TEL. 03 (5362) 7201



写真1 婦人用ベスト



写真2 袖ぐりの白色編地部分が紫色に染まった状態になっている

■ 品 名…婦人用ベスト（本体は紺色編地、袖ぐりは白色編地を使用）

■ 素 材…綿 100%

■ 取扱い絵表示 

■ 処 理 方 法…中性洗剤と家庭洗濯機による水洗い（ウェットクリーニング）、洗浄・すすぎ・脱水を含めて全工程 15 分程度、自然乾燥、パフアイロンによる仕上